

おわりに

2015年7月、静岡県立大学で開かれたフィリピン研究会全国フォーラムのなかで、JFCの若者によるトークセッションがおこなわれた。司会、進行をつとめたのは太田貴さん。パネリストとして、ロンドン五輪で柔道のフィリピン代表となった保科知彦さん、女子プロレスラーの朱里さん、浜松市職員で日本語教室の指導にもあたっている長井健太さんが登壇した。

「フィリピンのルーツは隠すことじゃない。フィリピンの気質を生かさなきゃもったいない」

JFCであることを強みに、それぞれの分野で活躍する若者の声を聞き、すでに新しい時代が到来していることを実感した。

一方でこの本を書いている間に、JFCがからむ悲しい事件もいくつか起きた。そのたびにフィリピン人の母親や子どもの間には、動揺が広がった。

安心できる居場所、心の拠り所となる人に出会えず、ありのままの自分を認めてもらえない、自分自身ともどうつきあっていけばいいのかわからない、そんな子どもたちが日本のあちこちにいる。もっとも、それはJFCだけでなく、ほかの外国につながる子ども、日本人の両親から生まれた子どもにもいえることだ。

本書では、国内のJFCを取り巻くさまざまな問題にふれてきた。だがいうまでもなく、問題はJFCという彼らのルーツではない。あらゆる「違い」に寛容になれない日本社会の側にあるのではないか。

フィリピンで人気のデザートに「ハロハロ」がある。ハロハロは「混ぜこぜ」という意味のタガログ語だ。デザートのハロハロはアイスやプリン、小豆、コーンにフルーツなどがどっさりのおたかき氷。

かつてスペインやアメリカ、そして日本といった国に支配されたフィリピンには、欧米とアジア両方の文化が根付き、国民のルーツもさまざまであることから、ハロハロ文化の国といわれることがある。フィリピンもまた数々の課題を抱えた国ではあるが、多様なものを許容する柔軟さ優しさは、日本もおおいに学ぶところがあると感じている。

この取材中、特にフィリピンではJFCとお母さんたちの陽気さには、いつも勇気づけられた。私の下手なタガログ語にも少しも嫌な顔を見せることなく、家に迎え入れ、苦しい生活であるにもかかわらず、食べ物をふるまってくれなことさえあった。義理堅いフィリピンの精神にならって、いつかどこかでこの恩を返すことができればと思っているが、いつまでも借りっぱなしである。せめて、ここで心からの感謝を述べたい。

マラミン・マラミン・サラマッポ！

最後になりましたが、数年にわたる取材に根気強くつきあい、応援してくださったJFCネットワークの伊藤里枝子さん、マリガヤハウスの河野尚子さんをはじめお世話になった

方々、諸先輩方、そして、素敵な推薦の言葉を寄せてくださった仁藤夢乃さん、挑戦的な出版を決意し、いつも励まし、丁寧な本づくりを進めてくださったあけび書房の久保則之さん、清水まゆみさんに心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

2015年9月

野

口 和恵